

様式(細則 5-2)

令和6年5月27日

浜田市議会議長 笹田 卓 様

議員名 芦谷 英夫

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため(視察 研修)を(実施 受講)したので、その結果を報告します。

記

- 1、日 時 令和6年5月18日(土) 13時30分～15時10分
- 2、研修内容 シンポジウム「益田の石見神楽と歴史と変遷Ⅲ」
- 3、研修先 益田市(EAGAビル)
- 4、調査経費 浜田⇄益田(JR利用) 3,460円
- 5、調査研究活動の概要 別紙のとおり



## シンポジウム「益田の石見神楽と歴史と変遷Ⅲ」

令和6年5月27日

- 1 日 時 令和6年5月18日（土）13時30分～15時10分  
2 場 所 益田市（EAGAビル）  
3 演 題 「益田の石見神楽と歴史と変遷Ⅲ」 県古代出雲歴史博物館 藤原宏夫、  
益田神楽社中 神田惟佑、コーディネーター御面屋恵木舞工房 恵木勇也

### 4 概 要

- ① 県西部に伝承する石見神楽は、大きく分けると石東（大田市）、邑智、石央（江津市・浜田市）、益田以西に分けられ、大田は出雲神楽の影響が色濃く見られ、邑智の大元神楽が演じられる地域もあり、鍾馗、塵輪を伝える団体もあり、出雲・大元・石見の神楽の異なるものが混ざり伝わっている。
- ② 邑智は式年の大元神楽が伝承され、和紙面（市木面）の伝統もあり、芸態の舞いや奏楽は、東部の江の川沿いは「阿須那手」、西部は「矢上手」などと呼ばれ、それぞれ広島県の芸北神楽に大きな影響を与えている。
- ③ 石央では海岸部は八調子神楽、中山間地域は六調子神楽、式年の大元神楽が舞われ、和紙面（長浜面）、刺繍衣裳、蛇胴（和紙）などが考案され、明治時代以降新しい演出を取り入れるなど独自に発展している。
- ④ 益田以西は山口県に近いところは独自の六調子神楽が伝わり、柳神楽（津和野町）、抜月神楽（吉賀町）、三葛神楽（匹見町）などのように、それぞれの八幡宮神職から伝授された独自の神楽として伝承されている。
- ⑤ 益田以西は八調子神楽とされているが、浜田や鹿足の神楽とも違い「石西の神楽」として紹介されており、益田の神楽は和紙面とともに木彫りの面、五神の巨大な面などがあり、舞いや奏楽も浜田とは異なり、地返し（鬼返し）、エビスなども独自の舞を伝える。
- ⑥ （石見神楽の違いを具体的に）エビスは、出雲地方では出雲の神主が西宮神社へ参詣、エビスの神徳を聞き、神主が逗留、エビスが現れ鯛を釣ることから、佐太神社で創られたのではないかと、邑智郡は出雲地方と同じ流れ。那賀郡は大人が美保神社へ参詣、エビスの神徳を聞き、大人が逗留、エビスが現れ鯛を釣る。益田以西は①釣りの舞のあと、天下泰平・五穀豊穰の舞を舞う。②ダイコクが登場し国譲り神話の祝詞を述べる、③エビスの弊と貧乏神の釣り竿を交換し鯛を釣る、などなど多様な舞があるようにそれぞれ変化している。

### 5 所 感

- ① このシンポジウムでは、益田市、石見西部から見た石見神楽について論じられたが、石見全体として一つにまとまる視点がなく、石見観光振興協議会（会長 浜田市長）として全体の調整が必要であり、浜田市としてその姿勢が問われている。
- ② 浜田市は「石見神楽を創り出した市を自認」し、石見神楽伝承内容の検討が行われ、市にある社中、衣裳、面、蛇胴などの神楽産業からの視点となり、石見神楽の広域性、伝播した時代の変遷など、専門的な知見などからの幅広い検討が必要。
- ③ 石見神楽について、石見神楽をどう舞いどう見せるか、どう発信し人呼び寄せるか、地域ごとの社中はどうかあるべきか、後継者をどう育成するか、子ども神楽を振興し子どもに伝えるか、神楽産業をどう伝承し発展させるか、神楽文化遺産をどう保存しどう伝えるかなど、手つかずの課題が残されている。 一以上一